

五月一六日(火)

我が家の食卓でノートパソコンと何やら印字された紙を広げながら、香織さんと彩夏とが二人でペンを片手に額を突き合わせている。宿題を見る親子、いや歳の離れた姉妹のように見えなくもない。

私はそれを眺めながら、コンロの前に張り付いている。火力の強い方にはたっぷり水を張った大きめの両手鍋。弱い方にも似たような片手鍋でお湯を沸かし、換気扇の下で何も聞こえないなりに、二人のやりとりをジッと見つめてしまう。

火の熱さに少々ぼんやりしていると、冷蔵庫に貼り付けたキッチンタイマーが唸り出した。慌ててアラームを切り、両手鍋のガスを切る。シンクには既に大きめのザルをセットしておいた。取手の熱さに注意しながら、三人分のパスタをザルの中へ移していく。

「あら、バターないんだ」

私の動きをしっかりと見ていた香織さんは、冷蔵庫を開けて言った。彩夏も彩夏で、食卓の上をザッと片付け、片手鍋のガスを切る。香織さんは「ないなら仕方ない」とドアポケットのマヨネーズを取り出し、湯切りをしたパスタに投下した。彼女はパッとマヨネーズを仕舞う。私はパスタにマヨネーズを絡め、いつかのパン祭りで交換した白いお皿に三等分していく。彩夏は引き出しから菜箸を探し当て、片手鍋のお湯の中にいたパスタソースのパウチを三つ、取り出した。キッチンペーパーで表面の水滴を軽く拭いてくれる。

「香織さんは、どれにします？」

「二人が先に選びなよ。残ったのでいって」

「じゃあ、彩夏が先に選んで」

三つとも全部バラバラの、賞味期限が少々怪しいレトルトソース。近くのスーパーで適当に買ってきて、そのまま仕舞い込んでいたのを引っ張り出しただけの、適当ご飯。彩夏は和風きのこを、私はイカ墨を選び、残りのミートソースが香織さんという結果に。パウチを開け、サイズが微妙に違うカトラリーを食卓に並べる。三人で「いただきます」と声を揃えた。

「他人ん家でこういうランチも、たまにはいいね」

香織さんは心底美味しそうにミートパスタにフォークを突き立てている。

「こんなモノしか出せなくて、すみません」

「全然気にしないで。パスタに麦茶とか、サイコーじゃない？」

香織さんは隣に置いた麦茶を豪快に飲んだ。ミートソースとのマリージュを、本気で楽しんでるように見えてくる。

「でも、色気がない冷蔵庫だわ。バターもマーガリンもないなんて、朝からちゃんと食べてる？」

学生の頃から、朝からしつかり食べる方ではなかったけど、社会人になってからは、ほとんど食べなくなっている。

「朝ってどうか、自炊もほとんどしてないでしょ」

彩夏が横から香織さんに加勢する。香織さんは大きく頷いて、「うん。アレは酒飲みの冷蔵庫だわ」と断言した。

「一人暮らしのアラサー女子だって、自炊ぐらいしますよ」

「へー。本当に？」

香織さんも彩夏も疑いの目で私を見つめる。彩夏はまだしも、香織さんにはさっきの手際で色々バレた気もする。大して汚れていない水回りにコンロ、五月も半ばというのに、換気扇だって比較的綺麗なままだし、それに引き換え、お酒の瓶や缶は見えるところに積み上がっている。

「こ、今度、ペペロンチーノぐらいご馳走しますよ」

「ペペロンチーノぐらい？ 聞き捨てならんぞ」

香織さんの目に何かが宿る。悪戯っぽい表情がかえって恐怖を煽る。どうやら私は何かを誤ったらしい。ほぼ初対面のはずの、二人のシングルマザーに、謎の結束力で追い詰められている。なけなしの私の女子力をかき集めても、太刀打ちできそうになかった。

初出 令和三年五月一七日 小説家になろうにて公開